



白隠禅師の描いた「達磨図」(松蔭寺蔵)



「白隠自画像」(松蔭寺蔵)

赤野(あけの)観音堂(柳沢)

白隠が子供の頃修学の場にしたこの御堂は寛永14年(1637)左甚五郎が三日三晩で建てたという俗説があります。ここには、後年揮毫した白隠筆「赤野山」の扁額が残されており、赤野観音のお告げについても白隠の法語に残しています。



はく いん ぜん じ 名僧 白隠禅師

(1685~1768)

駿河には過ぎたるものが二つあり 富士のお山に原の白隠

白隠禅師は貞享2年(1685)12月25日、原の長沢家の3男として生まれ、幼名を岩次郎といいました。11歳の時、母に連れられて行った、近くの昌原寺(日蓮宗)で地獄の説法を聞き恐怖感を持ち、地獄から逃れる道を求めました。西念寺の天神様に祈ったり、沼津市柳沢の八畳石や赤野観音で修行しましたが、元禄12年(1699)、15歳の時、松蔭寺で出家得度、慧鶴(えかく)という僧名をいただきました。大聖寺(沼津市幸町)を経て、良師を求めて全国各地を行脚しましたが、24歳の時、越後(新潟県)の高田・英巖寺を訪れ、寝食を忘れて坐禅。遠くからの寺の鐘の響きに悟りを得ました。その体験に自惚れていましたが、道友の一人に信州(長野)の飯山・道鏡慧端(正受老人)を訪ねることをすすめられ、老人から傲慢な心を折られた上、厳しい指導を受け、深い悟りを得ることができました。33歳の時、松蔭寺の住職となりましたが、さらに修行を続け、42歳、法華経を読んでいた時、こおろぎの声で大悟徹底しました。それ以来、慈悲の心を持って全国から参集した修行者の指導をするともに、各地に赴いたり、東海道を往来する各層の人々に教えを説き、明和5年(1768)12月11日、84歳で他界するまで、黒衣の禅僧として衆生済度に献身しました。現在、「日本臨済宗中興の祖」とたたえられ、白隠の禅画は、日本のみならず欧米の人々に注目されています。

富士山大噴火

江戸中期の宝永4年(1707)、白隠が修行時代の頃、富士山の噴火が起こりました。富士山のみもと原宿の松蔭寺で、他の住人たちは寺を飛び出し他所へ避難する中、白隠だけ寺に留まり坐禅を続けていたそうです。この噴火で天に舞い上がった灰は、それから15日間も、原宿の上に降り続けました。

帯笑園〔国の記念(名勝)登録文化財〕

原には、シーボルトにより、「東海の名園」と讃えられた、植松本家の庭園・帯笑園(たいしょうえん)があります。江戸時代中期から大正時代まで、大名や公家、文人墨客が立ち寄る庭園植物や、京都文化のサロンでもありました。白隠禅師のもとで修行した斯経慧梁(しきょう・えりょう)禅師は、この庭園の一角の庵で起居しました。京都の海福院(妙心寺塔頭)の住職となり、親交のあった池大雅、円山応挙をはじめとする京都の画家や文人と植松家との懸け橋となりました。

八畳石

白隠が13歳の頃、この石の上で修行したと伝えられています。寛永12年(1635)の洪水により東方の山腹から転落してきたとされる巨大な安山岩で、石の高さは約3mあります。



白隠のみち

沼津市原の旧東海道から一步入ったところに平行して「なかもち」があり、西方より、白隠生誕地にある「産湯の井戸」、白隠が幼少の頃よく参詣したといわれる西念寺の「天神社」、白隠が住職となった松蔭寺の開山堂や墓所、修行僧の宿坊としても使用された長興寺等の歴史的な地域資源が点在しているほか、松蔭寺と長興寺の間には修行僧が通った「白隠道」が残っており、独特の景観を生み出しています。南方には修行僧が坐禅を行ったといわれている「千本浜海岸」が位置しています。



白隠ゆかりの原の寺々

しょういん じ 松蔭寺(白隠さん)



白隠宗の大本山で、白隠が出家し、のちに住職をつとめたこの寺には、白隠が描いた禅画や県指定史跡となっている墓が境内に遺されています。また、開山堂には生前に作られたという白隠木像がまつられています。毎年4月29日には「寺虫干し」として白隠禅画が展示されます。

ちょうこう じ 長興寺(こんびらさん)

臨済宗妙心寺派の寺で、白隠禅師のもとに集まった修行僧の宿坊として使われ、松蔭寺との間に「白隠みち」と呼ばれる小道が残っています。

せいぼん じ 清梵寺(お地蔵さん)

臨済宗妙心寺派の寺で、建物正面に白隠禅師の「願王閣」の扁額があり、本堂には、山岡鐵舟の「願王殿」の扁額があります。また、白隠禅師の「地獄極楽変相図」は、年1回7月の地蔵尊祭の時に開帳されます。

さいねん じ 西念寺(天神さん)

時宗の寺で、白隠禅師が幼かった頃、母親のすすめで、西念寺にある学問の神様菅原道真公をまつる天神社へ、地獄の苦しみから逃れたい一心で、日々参拝に訪れていました。

しょうげん じ 昌原寺(七面さん)

日蓮宗の寺で、7歳の時、この寺で聞いた「堤婆品」を暗誦し、人々を感動させました。11歳の時に母親に連れられて、日厳上人の生き地獄の話しを聞いた岩次郎(白隠の幼名)は、母親に「地獄の苦しみを免れる法」をたずねると、天神さんへのお参りをすすめられました。この「地獄からの解脱」が、白隠出家の動機、テーマとなりました。

とくげん じ 徳源寺(子安さん)

臨済宗妙心寺派の寺で、14歳の時、均首座に古典の素読、読み書きを習い、三ヶ月で『句双紙』を暗記しました。出家の思いが募り、15歳で松蔭寺で出家しましたが、得度式の折、住職の東芳和尚が立会い、祝偈を贈りました。